

東京外国語大学 COE プログラムに関する 共同報告

2006年10月

1) プロジェクト計画

2002年に着手されたCOE研究プログラムの目的の詳細な内容がパネル会議には公開されていないため、私たちは十分な情報に基づいた評価を行う立場にはいない。しかし、提供された研究成果をもとに、ある程度まで当初の計画を推測することができる。研究成果を見ると、当初の計画が幾つかの非常に明確な特徴を掲げたものであったろうことは想像に難くない。第一に、音声学、形態論、統語論、語彙論だけでなく、語用論や社会言語学も含めた言語学の諸分野、第二に、特にCALL（コンピュータ補助による言語学習）教材を全体的な教育プログラムに取り入れるなどの研究方法、第三に、より効果的な言語教育を可能にするための実際的な目標、に関し賞賛に値する広い視野が見られる。

言語学研究に関しては、4回にわたる国際会議およびワークショップ、また言語情報学に関する出版物が既刊4冊、5冊目が近日出版予定、というのをみてもプログラムの質の高さと一貫した取り組みを物語っている。パネル出席者は、2006年9月に開催されたワークショップの際の見事な組織編成と連携ぶりに感銘を受けた。

2) 独自性

言語情報学という用語は少なくとも1980年代にまでさかのぼるが、TUFSプロジェクトはこの用語に新しい意味合いをもたせている。言語習得、言語理論とコンピュータを統合した新しい学際的分野としての言語情報学である。当プロジェクトには独自性をうたえない分野も含まれるが、理論言語学・(コンピュータ)応用言語学・コーパス言語学を統合し、COEプログラムで対象としている17言語もの多様な言語を扱った多言語CALLプラットフォームを構築するというCOEの目標には確かに独自性がある。理論に導かれた言語分析と実際の言語教育への具体的な応用の組み合わせは他に例を見ない。例えば、ある語彙項目が最も高い頻度で使われる文脈のコーパス分析に裏付けられた語彙項目の用法説明などである。委員会の見解では、このアプローチは教材の効果を高め、理論的研究課題の形成を鮮明にするものである。

本プロジェクトにおける多言語アプローチは、既に対象とされている言語にも、また追加される可能性のあるいかなる言語にも、包括的で有用な枠組みとなっている。これは、研究者と言語学習者の双方にとって非常に有用で、貴重な比較の道具

となる。通言語文法モジュールは、母国語と第二言語の言語間の比較を提供することで学生の言語学習の補助となる。また、研究者にとっては、アジアの言語を含む広範な言語に共通の枠組みにより、広範な比較対照研究を促進するものである。特筆すべきは、この枠組みが言語間の潜在的な類似性を最大化しつつも、単一もしくは少数のテキストソースを何通りにも翻訳するとおこりがちな、対訳テキストに付随する文化的干渉を回避している点である。その結果、それぞれの言語への比較可能性と適合性がともに見られることは特に賞賛に値する。

3) 科学的性格

明らかに主要な応用であるインターネットを用いた言語学習プログラムは先に述べた通り非常に興味深い。しかし、インターフェースに使われている言語が日本語であるため、パネル出席者がインターフェースのデザインについて述べるには限界がある。英語やその他の言語によるインターフェースが加わることを待望する。

UBLI (言語運用を基盤とする言語情報学) シリーズは様々な国の学者による非常に興味深い研究成果をまとめたものである。なかには最先端に行く研究もあれば、様々な分野や下位分野の概観を示す有益な研究発表もある。しかし指定されたフォーマットのせいで個々の研究プロジェクトにおける理論的側面の発展がある程度妨げられたきらいはあるように思われる。最新の重要な言語理論、例えば、生成文法や認知言語学、構文文法、機能文法やパターン文法などへの言及が比較的乏しいことが気になる。これは、執筆者が決められた時間的制約を尊重し、コーパス分析の広く豊富な研究成果をあげることに専念しようとするあまり、時間とスペースの不足から理論的議論を要約したためと思われる。シリーズの内容は執筆依頼を引き受けた学者の専門分野によりある程度決まってしまうため、様々な下位分野の取り上げ方に少し偏りが見られた。今後の UBLI 出版では、シリーズの巻や項を紹介する理論的論文を執筆または依頼することを検討してもよいだろう。

教育への応用に関しては、いくつかの分野においては最先端のコンピュータ言語学が言語学習モジュールに組み込まれるほど十分に発展していないということも認識されなければならない。これは批評というよりさらなる発展へのチャンスと受けとめていただきたい(「結果」参照)。

国際会議やワークショップの組織については、2006年9月のワークショップに招待された側の視点から言うと、日本人研究者、大学院生や世界各国の研究者と知り合い、意見を交換するきわめて価値ある体験となった。大学院生にとっては、著名な学者と身近に接することのできる貴重な機会であった。

4) 国際的な貢献

東京外国語大学 COE プログラムの国際的な貢献は、幾つかの観点から評価することができる。

第一に、教育的応用の対象となった言語範囲の国際性について。この点において、本プログラムは非常に国際的であり、類型学的には異なる多数の言語が、統一され

た方法論的、体系的アプローチをもって扱われている。

第二に、国際的な研究成果の利用について。例えば、フランス語学では、本プログラムは、フランス語の口語（エックス・アン・プロバンス）コーパスを研究している最も本プログラムと関連性の深い機関の協力を得ている。以前のワークショッププログラムでは、統語的語彙（LADL）や構文解析（Intex）の領域で他機関と提携している。これら他機関との提携レベルが正確にはどの程度のものであったのか明らかではないが、本プログラムが貴重な国際的ネットワークをつくりあげていることは間違いない。

第三に、研究成果の国際的提供について。『Usage-Based Linguistic Informatics（言語運用を基盤とする言語情報学）』シリーズ（ジョン・ベンヤミンズ出版）は、国内研究者と UBLI 国際ネットワークのメンバー双方の研究成果を世界中の学者に提供している。

パネル出席者の要望に対する回答によると、さらなる重要な前進が今後予定されている、あるいは既に見られるとのことである。成果は世界中の研究者に提供されることになっている。すなわち、要求に応じたコーパスの頒布、ソフトウェアのオープンソースでの公表、言語モジュールの他研究機関による利用実現が予定されている。

最後に、プログラムの国際的認知度について。この点においては、研究成果をウェブサイト上で英語でより体系的に発表しさえすれば、COE プログラムはさらなる国際貢献を達成し得るであろう（評価を下した時点では、ウェブサイトの「外殻」のみ英語で見ることができ、詳細情報のある下位レベルは日本語であった）。

5) 実現可能性（結果）

9月15日に行われたパネル会議では、出席者は本プログラムの実現可能性に関する事後評価を行うことに懸念を表明したが、今、全員が感じているところでは、例えば対照分析、類型論的記述、言語教育への応用などにおける成果は、それらが2002年に策定された計画に厳密に沿ったものであるかは我々には不明だが、東京外国語大学 COE プログラムに対する肯定的評価が正当なものであることを証明するのに十分すぎるものである。

むしろ、CALL プログラムを使った学習者が達成した言語学習の質を分析していくことも有益であろう。

6) 科学的業績

第2項で東京外国語大学 COE プログラムの独自性を指摘し、第4項でその国際的貢献を指摘した。

9月15日の発表で、大量の口語と文語コーパスが作成され、注釈がつけられ、COE プログラムで使用できるようになったことが明かにされた。UBLI プロジェクトの報告中に、数ヶ国語について COE 言語モジュールとこれらの「リアルデータモジュール」間の相互作用が示された。東京外国語大学の第一の目的が CALL 応用にあるこ

とを考えると、これらはすばらしい業績である。しかし、現在の成果と将来の目標がどの程度まで NLP（自然言語処理）技術の発展に依存しているのかがはっきりしなかった。例えば、評価時点では文法モジュールはまだ開発段階にあり、意味の曖昧性の解消はもとより、品詞タグ付けや構文解析などの技術の統合は示されなかった。インタラクティブな CALL モジュールはこういった技術を必要とする一方で、多言語向けにそのようなツールを開発することについては、17 の言語用にすでに開発されたものを発展させる明白な余地はあるものの、COE プログラムの規定目標をはるかに超えている。しかし、プログラムの業績が同じことの繰り返しに限定されないようにするには、適切な分野における有能なパートナーとの提携が次の段階では検討されるべきであろう。この点において、また他の面においても、海外で行われている同様の研究を考慮することが賢明であろう。例えば、IPA（国際発音記号）音は、ピーター・ラディフォギッド著『母音と子音 (*Vowels and Consonants*)』やオンラインのジョン・ウェルズ (*John Wells on-line*) などのように、それが発生する特定の言語に関連付けた説明が考えられる。さらに、市販の商品のなかには、発音の超分節的側面について高度なフィードバックが可能なものもある。

UBLI プロジェクトは多数の国の研究者を結集し、出版された研究論文集（叢書）のシリーズには最先端の研究発表が掲載されている。

全体としてみると、協力を依頼された海外の研究者を除いて、ほとんど国内の研究者だけで意欲的な言語学プログラムをつくらうとしたことは大胆な決定であった。同じような状況にある西洋の多くの大学ならば、拠点研究機関以外でのプログラムの認知度を即座に高めるため、著名な学者を迎え入れようとしたであろう。資料を見る限り、国内で開発するという方針により、明らかに遠大な目標を達成するには、恐らく 5 年では短すぎたということになる。しかし、東京外国語大学が助成を受けた際の状況を知らない以上、パネル出席者の見解は限られたものではある。検証した内容を踏まえる限り、プログラムがその可能性をすべて達成できるように、助成を継続して受けられるよう心から願う次第である。

7) 若手研究者の育成

若手研究者育成については、出席者はワークショップで非常によい印象を持った。大学院生と指導教員の連携は極めて良好のようである。多くの若手の研究者が国際的なフォーラムで自主的に（9 月のワークショップではそうであった）研究発表をする機会を与えられている（もしくは過去に他の機会を与えられた）ということに委員会は好感を持った。

会議参加の詳細なリストを見ると、個人であれグループであれ、国際的学者からなる観客を前にして研究成果を発表する機会を得た学生は 21 人を下らないことがわかる。複数回そういった機会を得ている学生もいる。こういった機会は若手研究者の育成において非常に貴重なものである。

ペーター・ブルーメンタール (ケルン大学, ドイツ)

ジャン＝フィリップ・ダルベラ (ニース大学, フランス)

ジャン＝ミシェル・エロワ (ピカルディー・ジュールヴェルヌ大学, フランス)

ピエール・クンストマン (オタワ大学, カナダ)

シャンタル・リュック (オスロ大学, ノルウェー)

イヴ＝シャルル・モラン (モントリオール大学, カナダ)

ティム・プーリー (ロンドン・メトロポリタン大学, イギリス)

アヒム・シュタイン (シュトゥットガルト大学, ドイツ)